

1. はじめに

これまで学説史上の多くの経済学者たちは、その研究の過程で、たびたび古典派の学説に依拠してきた。その一方で、彼らの学説はまた、古典派研究に新たな視点を吹き込んできたともいえる。このことは、価値論におけるマルクスとスミス・リカードウとの関係、有効需要論におけるケインズとマルサスの関係、さらには価格体系と分配に関するスラッファとリカードウとの関係を考えれば、理解することができよう。

ところで、このような形で古典派研究に新たな視点を与える可能性を持つにもかかわらず、その意義が必ずしも評価されてこなかったものに、ハイエクの「リカードウ効果」を挙げることができる。ハイエクはケインズと入れ替わるように、理論経済学とくに景気循環論での影響力を失墜させたことに加え、リカードウ解釈として考えたとき、ハイエクのこの説明には問題があるとする立場が存在してきたことが、その背景にあるといえる。

ハイエクの「リカードウ効果」とリカードウ本人の見解との関係については、Hollander(1971, 114)のように肯定的に捉える把握する立場、そして Blaug(1978, 543-48: 訳, 877-90)のように両者を一応区別して考えつつも、リカードウからハイエクへの理論的發展を読み取ろうとする立場が見られる。だがその一方で、Kaldor(1942, 367)のように、「リカードウ効果」を「明らかに間違った命名」として切り捨てる立場もある。これには、「ハイエク効果」という言葉をあえて用いた Schumpeter (1939, 345) や、Ferguson (1973) や Zamagni (1987) などの、多くの見解を加えることができる。

以上のような対立状況をふまえ、本報告では、ハイエクの「リカードウ効果」が、機械導入についてのリカードウ自身による機械導入の考察。そしてハイエクのこの議論は、古典派経済学の研究に対して、どのような論点を新たに提示しうるのか言及する。

以下、まず第2節では、「リカードウ効果」の一般的理解を促進するために執筆された、Hayek(1969)をもとに、その簡単な説明を試みる。第3節では、リカードウによる機械導入の想定をふまえて、ハイエクの説明はリカードウ解釈として妥当かどうか検討する。第4節では、ハイエクの説明がリカードウ解釈として疑問があるとすれば、古典派のどのような学説とより強い関連があるのか検討する。最後に、結びでは「リカードウ効果」が古典派研究に対して提示しうる論点について考えたい。

2. ハイエクによる「リカードウ効果」

リカードウ効果という名称は、Hayek(1939)で初めて用いられ、またこの言葉をタイトルにした論文('The Ricardo Effect')が42年に出ている。当時は、経済理論におけるハイエクの影響力の低下もあり、この言葉が一般に受け入れられたとは彼自身考えていなかった。その後、Hicks(1967)での論評をきっかけに、ハイエクはその周知をねらった論文を69年に公表する。本節では、この論文をもとにリカードウ効果の概要を確認する。

42年の論文の冒頭では、リカードウ効果は「賃金の上昇は労働に代替して機械を使用するよう資本家促すであろうという、よく知られているリカードの命題」(Hayek 1976[1942], 220: 訳, 293)として紹介される。だがハイエクがその景気循環論の中でこの効果を取り上

げる場合、「賃金が生産物の価格との対比において、上昇することの持つ効果ではなく、その下降が持つ効果」との関連を強調している（*Ibid.*, 223:訳, 295）。69年の論文はこの流れの上で展開されている。

同論文においてハイエクはまず、所与の生産量のもとで利潤を最大化する消費財生産者を想定する。そして縦軸に投入・産出、横軸に資本ストックをとった等量曲線を考えている。厳密さという点で問題があることを認めつつ、ハイエクは価格関係に変化は生じないとの想定をとり、いずれも価値タームで測られるとしている。このような設定のうえで、消費財価格の上昇に応じてこの曲線上の点がどのように移動するかが考察される。

ハイエクは完全雇用下の経済を想定し、消費財需要が増加しても、貨幣賃金は消費財価格ほどには上昇しないと論じる。そしてこの実質賃金下落に対応して、より労働集約的な方法が選択され、投資財の生産が減少することが、特にリカード効果として論じられる。所与の資本ストックのもとで最大可能な生産量が追究されるケースもまた考察され、この場合も消費財価格が上昇すれば、より労働集約的な生産方法へのシフトが生じることが示される。以上の考察から、ハイエクはリカードウ効果を「完全雇用の条件下では、消費財需要の増加は投資の減少をもたらすこと、また逆の場合には逆の結果が生じることを主張」（Hayek 1969, 274）するものであるとしている。

リカード効果はさらに、ハイエクの景気循環論の中でしかるべき位置づけを与えられる。彼はまず、好況とともに設備投資が活発となり、信用市場や内部留保の取り崩しによって、流通貨幣量が増大してゆく状況を想定する。ハイエクによれば、このような流通貨幣量の増大は、物価水準の全般的上昇をもたらす。ただし「実質投資水準を維持するのに必要な率」（*Ibid.*, 280）で貨幣量が増加してゆくなれば、インフレーションをともしつつも景気拡大は無限に持続しうることも論じられている。

とはいえ景気拡大とともに、企業はしだいに設備投資資金の調達上の困難に直面することになる。信用市場を完全と想定することは現実的ではなく、さらなる設備投資のためには、利子率がより高く設定された市場で資金調達をせざるをえない。長期の投資計画が頓挫するとともに、貨幣供給量の増加にも歯止めがかかり、投資財の価格は低下してゆく。そして信用の拡張と投資財生産に牽引されなくなった時点で、景気は崩壊に向かう。「信用の拡張が累積的に続くのではない限り、インフレーションをもとにした好況は、遅かれ早かれ投資の減少によって反転する」（*Ibid.*）。

だが、「新たな貨幣の流入が止み、その結果としてより少ないファンドが投資のために利用可能となった後でも、消費財価格はある期間上昇し続ける」（*Ibid.*, 282）。企業にとっては消費財生産を拡大する余地が残されているが、長期的投資のための資金調達はもはやできない。さらに消費財価格の上昇に比例して貨幣賃金は上昇せず、実質賃金は低下する。これらの事情から、より労働集約的な生産方法への変更、すなわち「固定資本の流動資本への転化」（*Ibid.*, 284）が進んでゆくこととなる。

3. リカードウにおける機械導入の考察

前節での検討から、ハイエクにおけるリカードウ効果はまず第一に、より労働集約的な生産方法、資本集約的な生産方法のいずれにも変化しうる任意の要素代替をふまえて、消費財価格上昇と実質賃金低下による、労働集約的な生産方法への代替に焦点を当てている

ことがわかる。第二に、景気循環論の中では、投資支出の拡大と貨幣的拡張を出発点として、消費財価格の上昇と実質賃金の低下を経つつ、より労働集約的な生産方法への代替が進むことが論じられていることがわかった。この節では、リカードウ本人による機械導入の考察が、この2つの特徴を有していたか検討する。

リカードウは、資本家が生産方法を選択するさいの基準は、利潤を増加させるかどうかにある点を強調している。よく引き合いに出される箇所であるが、『経済学および課税の原理』第1章第5節（投下労働量による価値規定は、資本の耐久性や回転速度により修正されることを扱った部分）では次のように論じられている。

いま、100人の労働者による1年分の労働に相当する生産が可能な機械を入手するのに、5000ポンドの費用がかかるとする。他方、100人の労働者に年々支払われる賃金もまた、5000ポンドであると仮定する。この場合「製造業者にとっては、その機械を買い入れようと、労働者を雇い入れようと、それがどちらでもよい問題」である。しかし「労働が騰貴し、その結果として1年間の100人の賃銀が5500ポンドにのぼるものと仮定すれば、製造業者はいまやもう躊躇しない」というのは「機械を買い入れて、彼の仕事を5000ポンドでやらせるほうが、彼の利益となることは明白」(Works, 40:訳, 45)だからである。

ところで、賃金騰貴により機械導入が有利になるのは、「賃銀上昇の結果として機械の価格が騰貴することはない」(Ibid., 41:訳, 46)からである。その理由について、リカードウは投下労働量による価値規定という観点から説明する。この価値論によれば、ある商品の生産に必要な労働量が増加しない限り、賃金が増しても商品価格は上昇しない。これは機械についても同様である。もし機械生産者がその価格を引き上げれば、機械生産部門では一般的水準よりも高い利潤率が獲得される。その結果、その他の部門から資本が流入し、生産者同士の競争を高めることで、利潤率を一般的水準まで引き戻す。

ここまでの議論は、突然の賃金上昇に対する反応を考察している点で、どちらかといえば比較静学的である。だがリカードウは、連続的な蓄積過程での機械導入という、動学的な考察も展開している。『経済学および課税の原理』第3版第31章「機械について」では、次のように論じられている。

リカードウの想定では、資本蓄積および人口増加とともに穀物需要が増加する。すでに肥沃な未耕地の存在しない社会では、劣等地へ耕作を拡大するか、もしくは既耕地への投下資本量を増加することで、穀物生産を拡大せざるをえない。これは単位穀物あたりの労働量を増加させ、穀物価格を上昇させる。リカードウにおいては労働(力)の価格は、生活必需品に応じて決定されるので、その主要な項目である穀物価格が増すれば、貨幣賃金も上昇する。投下労働量による価値規定では、賃金上昇は生産物価格を引き上げず、利潤を圧縮する。ところで上記のように、賃金上昇は機械の価格を引き上げない。それゆえ蓄積過程では、機械導入が進められてゆく。この結果、資本蓄積とともに、労働需要は増加するが、比例的には増加しなくなることが導出される(Ibid., 395:訳, 453-4)。

機械導入に関するリカードウの考察の概要は、以上のとおりである。リカードウは賃金上昇が機械導入の誘因となるとしている点で、生産要素の相対的な価格変化に応じた生産要素比率の変化、すなわち要素代を論じているようにみえる。だがよく見るとリカードウは、賃金上昇による機械導入は論じていても、その逆は取り扱っていない。シュンペーター以来、さまざまな学説史家が指摘してきたように、リカードウは労働節約的な新発明の、生

産過程への導入を主に論じていたと考えるのが妥当であると思われる。

またリカードの蓄積過程は、利潤からの再投資をもとに進行することを想定しており、貨幣的要因はあまり重視していない。ハイエクのように、信用供給による「自発的な貯蓄率によって正当化される水準以上の投資」(Hayek 1969, 282) は想定されていない。さらにリカードは蓄積過程の考察においても、劣等地耕作にともなう土地の収穫逦減と貨幣賃金上昇から、機械による労働の代替を考察している。ハイエクのような、消費財価格上昇と実質賃金低下をうけた労働による機械の代替は、ここでは全く見られない。

4. 古典派における先駆的議論

リカードによる機械の考察は、ハイエクのリカード効果についてまとめた2つの特徴をいずれも満たしていない。それゆえリカード効果は、カルドア以降、さまざまな論者が指摘してきたように、リカード解釈としての妥当性には疑問があると言わざるを得ない。だとすればハイエクのこの説明は、あくまで彼の景気循環論の中の一理論とみなすべきで、古典派経済学を論じる際の立脚点の一つとはなり得ないようにも見える。

だが、リカード効果を通して古典派を見ると、貨幣拡張の影響という点から、意外な一側面が見えてくる。まずこの点で着目するのは、カンティロン (Richard Cantillon, c.1680-1734) である。ハイエクは 1931 年に、『商業試論』のドイツ語訳を長文の序文とともに出版している。Hagemann and Trautwein(1998)は、この点からハイエクの景気循環論がリカードだけでなく、カンティロンの影響も強く受けていたと論じている。

ハイエクの『商業試論』が問題となるのは、その第2部 ～ 章である。ここでは、貨幣供給量の増加が国民経済に及ぼす影響が論じられている。まず 章では、貨幣供給量の増加が、物価を上昇させることはロック以来よく知られているが、それがどのような経路で進行するかは解明されていないという。そこでカンティロンは、鉱山で生産された貴金属が、鉱山所有者、事業者、および労働者の所得を増加させ、消費へと入ってゆく過程を説明している。

ここでは、Blaug(1978, 21:訳, 36) が指摘したように、カンティロンは貨幣供給量の増加が物価水準を上昇させるだけでなく、価格構造もまた変化させることを認識し、その中で「金鉱の産出高の増加がいかんしてまず鉱業における所得に影響し、ついで消費財支出に、さらに食物の価格に影響し、農業利潤を騰貴させ実質賃金を下落させるか」を論じている。この意味では、ハイエクの想定（とくに消費財価格の上昇と実質賃金の低下）に通じるものがあると考えられる。

ただ、貨幣的拡張と相対価格の変化をともしう経済の拡大という点は、カンティロンにおいては必ずしも明確ではない。この点で議論を押し進めたのはヒュームであろう。彼は「貨幣について」という論文の中で、貨幣供給量の増加が国民経済に及ぼす影響について考察している。国内に流入した貨幣の伝播過程をふまえて、一般的な物価上昇に対して貨幣賃金の上昇が遅れること、それが利潤を増加させ、一時的に国内生産の拡大に導くことが論じられている (Hume 1987, 46-50:訳, 56-60)。ただヒュームには、固定資本および流動資本といった区別はなく、相対価格の変化（消費財価格上昇と実質賃金低下）が労働による機械の代替に結びつくことは全く論じられていない。

この点で、より強い関連が見られるのは、リカードと同時代に、機械の問題を本格的に扱

ったジョン・バートンであろう。彼は『社会の労働者階級の状態』という 1817 年のパンフレットによって、リカード機械論改変に影響を与えた存在として認識されてきた。だが、その機械論を検討するならば、リカードのそれとの相違も多いことがわかる。

バートンは蓄積過程において、生産物に占める賃金の割合、すなわち実質賃金が高まるならば、資本家は「できるだけ人手を少なく雇っておこうと」、流動資本に対する固定資本の割合を上昇させるといふ。逆に、生産物に占める賃金の割合が低下し、実質賃金が低下する場合には、「より多くの人手を雇用するよう」に、固定資本に対する流動資本の割合を上昇させることもまた論じている (Barton 1817, 17-8: 訳, 27)。また資本規模一定の場合にも、バートンは同様の考察を示している (Ibid., 24: 訳, 34)。これは Schumpeter (1954, 679; 681-2: 訳, 1425; 1428) で指摘されたように、要素代替論の先駆と見なしうる。

さらにバートンは、18 世紀前半からの南アメリカでの鉱山の生産性上昇が、ヨーロッパに流通する貴金属量を増加させたことにまず注目する。そしてこの現象は、全般的な物価騰貴をもたらしたが、それに比例して貨幣賃金を上昇させなかったため、実質賃金の低下と固定資本に対する流動資本の増加をもたらしたということを論じている。「貴金属が増加して豊富になったことが、労働の価格よりも大きな割合で商品の価格を引き上げ」、雇用者に「流動資本を増加させ... 支払う手段を有するかぎり多くの人手を雇用するようしむけ」たというのである (Barton 1817, 29: 訳, 40)。このようにバートンは、貨幣的要因を重視した上で、実質賃金低下からより労働集約的な生産方法への代替が生じることを考察していた点で、ハイエクの想定により近いものであった。

5. 結び

以上の内容では、ハイエクによるリカードウ効果と、リカードウ自身の見解との関係を検討し、多くの論者が指摘してきたように、ハイエクの説明はリカードウ解釈としては妥当性に疑問があることを確認した。ケインズの出現以降、理論経済学者として追い詰められてゆく中、ハイエクはリカードウという権威に訴えることで、自らの理論への注目度と説得力を高めようとした (Moss and Vaughn 1986, 557-8) のだとすれば、なおさら解釈上の妥当性を認めることはできないだろう。

だがこのことは、リカードウ効果が古典派経済学を論じるにあたっての立脚点として、全く用をなさないことを意味してはいない。本報告で論じたように、貨幣供給の増加が相対価格、そして経済成長におよぼす影響という点では、カンティロンおよびヒュームの見解が見えてくる。さらに、要素代替的な考え方、貨幣的拡張と実質賃金低下の中での固定資本の流動資本の転化という点では、バートンの見解が見えてくるのである。

リカードウ効果との関連で浮かび上がる、新たな論点としてはさしあたり、次の 2 点が考えられる。まず第一に、古典派の機械論は、労働節約的な機械の導入が雇用や分配に及ぼす影響を論じたものと考えられがちだが、バートンはその通念を覆すものだという点である。バートンと古典派のその他の論者との関係を追究することで、古典派の機械論さらには資本蓄積論について、新たな理論的整理が可能となるかもしれない。

第二に、カンティロンからヒュームへのつながりについては Blaug (1962, 29) のように、これまで指摘が存在していたが、今回、その先にバートンを想定しうる可能性があることがわかった。バートンは 1814 年～17 年にかけて作成した手稿 (Sotiropoff 1953) の中で、ス

ミス、リカードウに加えて、ヒュームにも多くの記述を割いており、ヒュームからの影響が伺われる。古典派における貨幣供給の増加と実体経済の関連について、カンティロンからヒューム、そしてバートンという一つの系譜が浮かび上がるといえよう。

参考文献

- Barton, J. 1817. *Observations on the circumstances which influence the condition of the labouring classes of society*, London. (真実一男訳『社会の労働者階級の状態』法政大学出版局, 1990) .
- Blaug, M. 1968. *Economic Theory in Retrospect*, 3rd edition., Cambridge:Cambridge University Press. (関恒義・浅野栄一・宮崎犀一訳『新版 経済理論の歴史』東洋経済新報社, - , 1986) .
- Cantillon, R. 1755. *Essai Sur la nature du commerce en général*. Traduit de L'anglois. A Londres, chez. Fletcher Gyles, dans Hlborn. (津田内匠訳『商業試論』名古屋大学出版会, 1992) .
- Ferguson, C. 1973. The Specialization Gap: Barton, Ricardo, and Hollander, *History of Political Economy*, 5(1).
- Hagemann, H. and Trautwein, H-M. 1998. Cantillon and Ricardo Effects: Hayek's contribution to business cycle theory, *European Journal of the History of Economic Thought*, 5(2).
- Hayek, F. 1939. *Profits, Interest and Investment*. London:Routledge & Kegan Paul.
- Hayek, F. 1976. *Individualism and Economic Order*, London:Routledge & Kegan Paul. (嘉治元郎・嘉治佐代訳『ハイエク全集 3 個人主義と経済秩序』春秋社, 1990) .
- Hayek, F. 1969. Three Elucidations of the Ricardo Effect, *Journal of Political Economy*, 77(2).
- Hicks, J. 1967. *Critical Essays on Monetary Theory*, Oxford: Oxford University Press.
- Hollander, S. 1971. The Development of Ricardo's Position on Machinery, *History of Political Economy* 3(1).
- Hume, D. 1987. *Political Discourses*, facsimile reprint. originally published, 1752, Düsseldorf: Verlag Wirtschaft und Finanzen.(小松茂夫訳『市民の国について』下巻, 岩波文庫, 1982) .
- Kaldor, N. 1942. Professor Hayek and the Concertina Effect, *Economica* 9.
- Moss, L. and Vaughn, K. 1986. Hayek's Ricardo effect: a second look, *History of Political Economy*, 18(4).
- Ricardo, D. 1951. *On the Principles of Political Economy and Taxation, Works and Correspondence of David Ricardo*, vol. I, Cambridge: Cambridge University Press.(堀経夫訳『経済学および課税の原理』雄松堂書店, 1972)
- Schumpeter, J. 1939. *Business Cycles*. New York: McGraw-Hill.
- Schumpeter, J. 1954. *History or Economic Analysis*, edited by E.B.Schumpeter from manuscript, New York; Oxford University Press.
- Sotirotff, G. 1955. Population Growth and National Strength by John Barton(1789-1852), *Kyklos*, 8.
- Zamagni, S. 1987. Ricardo-Hayek effect, John Eatwell, Murray Milgate and Peter Newman eds. *The New Palgrave, A Dictionary of Economics*, Vol. , London:Macmillan.